ただ、あなたのために

不二　驟雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ただ、あなたのために

【Ｎコード】
Ｎ１２３３Ｊ

【作者名】
不二　驟雨

【あらすじ】
始まりは中学校の最後の大会からのできごと・・・
この大会からすべてが変わってしまった・・・

～春～

ただ、あなたのために～春～」
ある中学３年の春

旧３年が卒業して、とても気楽になりきぶんが浮かれていた

俺の中学は、一年に一回クラス替えがあり、今年もクラス替え。

いまだになぜこんなにクラス替えをするのかとても疑問をいだいていた

でも、こんなにクラス替えをしても同じクラスになってしまう奴が５．６人いる

校門のクラス替えの紙を見ていたら

その中の１人、小橋勇が来た。

「よう。リュウ。また同じクラスだな」

「勇・・・お前リュウって呼ぶのやめろ。また今年も間違えられちまうからさ・・・俺の名前はタツだ」

小橋勇とは中一からのずっと同じクラスだ。

勇は俺のことを普段は「タツ」と呼ぶ

普通に読むとリュウと読めるのだが、両親がリュウだと兄と間違えるため「タツ」となった。

それで、勇はなにを思ったか、この春のクラス替えの時期だけ俺のことをリュウと呼ぶ

理由を聞いたが名前を間違えられいつも本当の名前を言っている姿が見てて楽しい・・だそうだ・・・

まあ・・・時々、タツではなくリュウと呼んでいるのだが・・・

「リュウ、お前今、俺のことを悪く思ったろ？」

勇に心を読まれたかと思って、思わずハッとしてしまった。

「図星だな・・・」

「・・・・・なんでわかったんだよ・・・・」

「リュウは顔に出やすいからわかるんだよ」

「そうか・・・今度から気をつけよう・・・・‥」

「いや・・・もうそういうことを考えるのはやめろよ・・・」

「わかった。わかった」

勇と俺でしゃべっていたら後ろから二人の背中をたたいて突然女の子・・・もとい女子が来た

「あれ～？また同じクラスじゃん～♪」

「おい千春！！いきなり背中をたたくのをやめろよ！！リュウがむせてんじゃねえか」

「気にしない♪気にしない♪」

「たく・・・・また、お前と同じクラスかよ・・・」

「本当は嬉しいくせに～♪タツも嬉しいでしょ？」

「ゲホッゲホ・・・え？・・まあ・・・そうかな・・」

「ほら～龍みたいに素直にならなきゃ～♪」

「たく・・・やべ！！こんな時間だ教室に急ぐぞ！！」

千春も勇とおなじ中一からの長い付き合いだ。
千春は語尾に間延びした口調が特徴であるが・・たまに男か女かわからないぐらいの力を使うときがある。

一年の時、その力の大きさに思い知らされた。

そして、俺の中学最後の学校生活とともに、俺の人生の歯車が大きく変わる出来事が舞っているとは知らず、いつもの生活が始まった。

～春～（後書き）

さて・・はじまった龍たちの物語
この先の展開はどうなっていくのでしょうか？
・・・・・といきなり言ってみたんですが・・
正直自身がないですね・・・・
まあ・・・どんな作品になるかわかりませんが
温かく見守ってくださいい

～暁～

俺のクラスは３Ｂとなった。
席は窓側の一番後ろ
席としてじゃ最高の席なんだが、前の二人が千春に勇となってしまった。
隣は・・たしか水野美佐といったかな・・・？初めて同じクラスのような気がする・・・
「おい。リュウが後ろかよ・・・・」
「・・・悪かったな・・・で？なんで千春まで俺の前なんだよ？」
「しらな～い。くじ運なかったね～」
「ま、ドンマイだな・・頑張れよリュウ・・・・・で、お隣のペッピンさんのお名前は？」
「え・・・？あ・・はぃ。私は水野美佐です。千春とは部活が同じで・・・・あなたの名前は？」
「俺は小橋勇。水野さんの隣は藤崎リュウだ」
「そうなんですか・・・リュウ君よろしくね」

おいおい、俺が説明したのに何でリュウなの？とか聞こえて来たが、それは放っておいて、俺は美佐に答弁した。

「いや・・・俺の名前はタツだから、リュウって漢字的には読むけど俺の名前はタツだから」
「え・・・だって今、勇君がリュウって・・・・」
「ああ・・こいつはいつもこの時期だけリュウって呼ぶんだよ」
「ごめんなさい・・・名前間違ってしまった」
ただ、あなたのためにある中学３年の春１

旧3年が卒業して、とても気楽になりきぶんが浮かれていた

俺の中学は、一年に一回クラス替えがあり、今年もクラス替え。

いまだになぜこんなにクラス替えをするのかとても疑問をいだいていた

でも、こんなにクラス替えをしても同じクラスになってしまう奴が5．6人いる

校門のクラス替えの紙を見ていたら

その中の1人、小橋勇が来た。

「よう。リュウ。また同じクラスだな」

「勇・・・お前リュウって呼ぶのやめろ。また今年も間違えられちまうからさ・・・俺の名前はタツだ」

小橋勇とは中一からのずっと同じクラスだ。

勇は俺のことを普段は「タツ」と呼ぶ

普通に読むとリュウと読めるのだが、両親がリュウだと兄と間違えるため「タツ」となった。

それで、勇はなにを思ったか、この春のクラス替えの時期だけ俺のことをリュウと呼ぶ

理由を聞いたが名前を間違えられいつも本当の名前を言っている姿

が見てて楽しい・・だそうだ・・・

まあ・・・時々、タツではなくリュウと呼んでいるのだが・・・

「リュウ、お前今、俺のことを悪く思ったろ?」

勇に心を読まれたかと思って、思わずハッとしてしまった。

「図星だな・・・」

「・・・・なんでわかったんだよ・・・・」

「リュウは顔に出やすいからわかるんだよ」

「そうか・・・今度から気をつけよう・・・・・」

「いや・・・もうそういうことを考えるのはやめろよ・・・」

「わかった。わかった」

勇と俺でしゃべっていたら後ろから二人の背中をたたいて突然女の子・・・もとい女子が来た

「あれ~?また同じクラスじゃん~♪」

「おい千春!!いきなり背中をたたくのをやめろよ!!リュウがむせてんじゃねえか」

「気にしない♪気にしない♪」

「たく・・・・また、お前と同じクラスかよ・・・」

「本当は嬉しいくせに〜♪タツも嬉しいでしょ？」

「ゲホッゲホ・・・え？・・まあ・・・そうかな・・」

「ほら〜龍みたいに素直にならなきゃ〜♪」

「たく・・・やべ！！こんな時間だ教室に急ぐぞ！！」

千春も勇とおなじ中一からの長い付き合いだ。
千春は語尾に間延びした口調が特徴であるが・・たまに男か女かわからないぐらいの力を使うときがある。

一年の時、その力の大きさに思い知らされた。

そして、俺の中学最後の学校生活とともに、俺の人生の歯車が大きく変わる出来事が舞っているとは知らず、いつもの生活が始まった。

まって・・・気に・・・・・・・のに」

美佐が最後のほうで発した言葉は聞き取れなかったけど、まあ気にしない。

「いいよ。気にしなくてさ。悪いのは勇のほうだから」
「そうですね・・・では改めてよろしくね龍」
おいおい。そりゃねえぜ、と勇
「ああ・・・よろしく美佐さん。」
「龍。さん付けやめてもらえるかな？私も龍ってよびたいから」

「ああ・・・わかった・・・」

会話中に勇がつっこみなのか嘆きなのかよくわからない言葉を発していたらが相手にしてもらえず千春に八つ当たりしていた。
しばらく美佐としゃべっているうちに千春が不思議そうに美佐に話しかけてきた。

「あのさ~美佐、三年になったら敬語だけしか使わないとか言ってなかったけ?」
「え・・・・あ!!忘れてた!!」
「天然だね~この子は~」

千春が美佐の頭をなでていたらなぜか勇が美佐によろしくといって話をしめてしまった
水野美佐はとても不思議な雰囲気を持った人だった。いつも何を考えているかわからなく、空気みたいな存在だった。(俗に天然というべきかな・・?)
それからよく俺と美佐はしゃべるようになった。俺はこれでも人見知りが激しいほうなのでそう簡単にはしゃべれるようになる人間ではない。(勇達の時もそうだった)
だが、俺は美佐とはしゃべれた。なぜだろう?なんかこう落ち着く感じは?
なんかなつかしいような感じは? 美佐としゃべっていると心地よくなった。
今、思うと俺はこの時から美佐に惹かれていったんだと思う。

その次の日新学年始めのテストが終わった後、三年となってからの初めての部活が始まった。
俺と勇はサッカー部に所属している。サッカー暦は二人とも同じ小学校のときのクラブチームは地域でも有名な弱小チームだったが、

中学にあがって地域でも強豪にまで育った。俺はこんな性格なのにＦＷをやっていて、勇はＧＫだった
千春と美佐はバドミントン部に所属していた。千春は県大会に行くほどの実力を持った選手だった。美佐はあまり目立つような選手ではなかった。（だから、俺も名前を知らなかったのかな？）
中３の夏の大会は負けてしまうと即引退になる。だから、この時期の運動部の三年生はこの夏の大会に全てをかけている選手が多かった。
俺たち四人もそのうちの１人でだった。
そして最後の大会まであっというまに時が過ぎた。その毎日の中では美佐としゃべっていることが多かった。この大会のこと。引退した後のこと。将来のこと。
最近の音楽のこと。いろいろしゃべった。
その中で俺は美佐の存在が大きくなっていったんだと思う。
そして時は来た。
明日に三年最後の引退をかけての大会が近づいていた。

～暁～（後書き）

さて・・・

そろそろ物語が動き始めそうな感じがあるようなないような・・・・

龍は暗い性格におもえますが根は明るいんです！！

お見苦しいですが温かくみまもってください

後、感想もお願いします

この頃の授業はほとんどと言っていいほど、先生の話を聞いていない。しかも明日が大会なのだから当然だと思う。先生たちもさほど気にしていないようだ。

俺はやはり授業内容もノートに書き写していない。頭の中は明日の大会の事でいっぱいだった。

でも、ちゃんと考えればわかる問題だと思う。先生たちも気を使って簡単な問題にしているし、クラスメートはその問題を当たり前のように解いていた。

だが、俺は勉強は全くできない。授業が簡単なのにだ

ただいまの授業は数学であり俺の不得意教科・・・もう最悪だ・・・

その時、美佐が気づいて俺に声をかけてくれた

「龍、この問題わからないの？」

「ああ・・・全くと言っていいほどに解らないんだ・・・・・」

「そう・・・でも、これじゃあ勉強とはいえないけどね」

「なんだだよ？」

「だって、龍の机の上、サッカーの本しかないから・・・・」

「あ・・・いけねえ・・・数学がいつの間にかサッカーの勉強に・・・」

「そんなの言い訳にしかならないよ？」

「そうだよな・・・このままじゃあ高校に行けね気がしてきた・・・・。・・・・そうだ美佐。俺が引退したら勉強教えてくれないか？」

「え・・・？いいけど・・・なんかやらしいこと考えてないよね？」

「おいおい・・・俺はそんな人間かい？俺はとても健康な中学生だぜ？」

そう俺が言った瞬間に美佐がくすくす笑い出した。

「ふふ・・・そうね・・・・で？どこでやろうと思ってるの？」
「まだ決めてないんだ・・・。まあ、勇とか千春とか誘って美佐の家か俺の家でやりたいんだが・・・・」
その言葉を言った瞬間、美佐は俺に向かって何か言ってたように聞こえた。
でもその言葉は俺には届いていなく。宙に消えてなくなってしまった。
「美佐？今なんて・・・」
「なんでもないよ~それより今回の大会に向けて調子はどうなの？」
「可も無く不可もなくかな・・・点取り屋の俺は気分によって変わるからな・・・試合をしてみなきゃあわからねえ」
「龍。それって点取り屋じゃなく気分屋って言うんじゃないかな？」
「・・・・そうとも言うかもしれないな・・・・」
どうやら美佐は俺との会話の中でずっと笑いをこらえていたみたいで、ここにきて笑い始めた。まるでワライダケでも食べたかのような勢いで。
「おいおい・・・笑い過ぎじゃねえのか？軽く傷つくぜ？」
「ごめんごめん。点取り屋あたりからもう笑いが止まらなくなってきちゃって・・・」
「まあ・・・いいけどさ・・・で？美佐は今回の大会はどうなんだ？」
このとき、俺はとても後悔した。さっきまで笑っていた美佐がいきなり暗い顔になってしまったからだ。たぶん今回の大会に向けての調整があまりよくなかったみたいだ。
やはり最後の大会だから緊張しているのだろう。
とはいっても俺は全く緊張していない。いや・・・緊張してはいけないのだ。
俺はあまりにも緊張しすぎると体が動かなくなる。昨年のこの大会で緊張して体が動かなくなってしまった。
美佐は俺と同じでリラックスしていないと上手く力が出ない選手だ

からそのつらさはよくわかる。
「大丈夫。美佐なら勝てるって。俺が保障する」
「うん・・・」
「おいおい・・・そんな気分じゃぁ試合を楽しめないぞ？」
「試合なんか楽しめるもんじゃないよ・・・ダブルスなんか自分のミスだけで負けちゃう事だってあるんだもん・・・」
「まあ、そうかもな。・・・でも、気持ちが落ちたままで試合に出る事と楽しもうって気持ちで出る試合は全然違うぜ？」
「そうなの？・・・たとえばどんな感じに違うの？」
「落ち込んだ気持ちじゃぁ、きつい場面のときに諦めが早くなってしまう。でも、楽しい気持ちならリラックスできるしきつくてもがんばれる」
「そうなのかな・・・？」
「おいおい・・・そんな事言ってると後ろから抱きつくぞ？」
「え？・・・やだ・・・そんな・・・」
「なに赤くなってんだよ？冗談だよ。」
「もう・・・龍の意地悪・・・」
「ふう・・・やっといつもの美佐の顔になったな・・・さっきまでひどい顔してたからな」
「そういえば、なんか気持ちが楽なったかも・・・龍。ありがとうね」
「礼ぇなんかいらねえよ・・・」
美佐のそんな顔見たくねえし、美佐には笑っててほしいから・・・という言葉は言えるはずもなく頭の中で木霊した。
その時、目の前に白い筒状の者が飛んできて俺の脳天に当った。
俺はその衝撃で後ろにふっトンだ（椅子の座り方がいけなかっただけなので吹っ飛んだだけだ）
「コラ！龍！なにしゃべってんだ！！」
担任の・・・健治だ・・・姓のほうが出てこない・・・
この担任の健治はこの学校でも有名なチョーク投げの名人だ。健治

の投げるチョークはスイカを貫通するとも言われている。いや。・・・まてそんなの食らったら死んでしまうな・・。反抗したいにも、健治は顔がほぼ極道者みたいな顔をしているので反抗が出来ないのだ。俺だけはよく反抗しているが・・・

ついでに健治のあだ名は「スナイパーの健治」だ。

「痛てえな・・・おいチョークの無駄だろうが。スナイパーだがなんだか知らんが痛てえものはい・・・・・」

その瞬間二発目のチョークがまた頭にクリーンヒットした。その瞬間クラス全体に沈黙が走り糸が切れたようにみんな笑い出して収集がつかなくなってしまった。

「おい。美佐そんなあ奴に話しかけられても無視しろよ？」

おいおい・・・先に放してきたのは美佐のほうなのに・・・・・と心の中で思ったでも当の本人はわかりました〜だからな・・・・

その時、美佐が軽く小悪魔に見えた。

そして、あっという間に時間が過ぎ部活も終え、明日には三年最後の大会になった。

～動～

やはり、俺も緊張していたようだ。昨日からあまり寝ていない・・。
ふと気がつくともう朝になっていた。その日の朝焼けはとてもきれいでとても心が和んだ。
さて・・・早く駅に行かなければ・・・
サッカー部は隣町の中学で試合の為、最寄の駅からその中学まで歩いていかなければならなかった。なので、部員は駅に集合してから、全員そろったら電車に乗るといった流れになる
駅にはまだ部員の姿は見えなかった。一人でもすることが無いので切符を買いに切符売り場に向かった
その時、見覚えのある女の人が立っていた。
「あれ・・・？龍・・？何でこんな時間に？」
「え・・・？美佐・・・？美佐もなんでこんな時間に？」
「集合時間より早く来てしまったみたいなの・・・」
「そうか・・・俺も集合時間より早く来ちまったみたいだな・・・」
「ちょっと座って話さない？龍も時間あるでしょ？」
「ああ・・・問題ないよ」
そういって俺は美佐と駅から少しはなれた休憩所みたいなところに腰を下ろした。
よく見ると美佐は少し髪型を変えたようだ。試合のときに邪魔にでもなるのだろう。
そうこう考えていたら少し眠くなってきてしまったのか体がふらついてきた
「龍・・・昨日あまり寝てないでしょ？」
「いや、とてもよい夢も見れたし、快眠だったぜ？」
「嘘・・・・下手だね・・・目の下にクマが出来てるくせに・・・

後寝癖が少ない」
「・・・・ばれちまったか・・・・」
「全く、前日にアドバイスした人がこんな状態じゃぁ説得力に欠けるよ？・・・まあ龍も人間だったたって事で一件落着かな？」
「・・・・おい・・・まるで俺が人間じゃないような発言だな？」
「あれ？そうじゃなかったっけ？」
美佐がそういった後とても微妙な空気が流れるのを感じた。
美佐も俺もそう空気に耐えられなくなったのか、二人揃って笑い出していた。何がおかしいのかもわからない、といった感じな笑いになっていた。
その時、自分の体に違和感があるのを感じた・・。たとえを挙げてみると二十四時間勉強をぶっ続けでやった後みたいな、異様な眠気と感覚麻痺が襲ってきた。
もし、このときに美佐が隣にいなかったらどうなっていただろう・・・？
今頃、コンクリートに頭を打って病院送りだろう。
「龍！大丈夫！？どうしたの？」
「ああ・・・・寝不足が原因らしい・・・昔もそういうことがあった・・・悪いんだが少しだけ眠らせてくれ・・・・」
「だったら、私のひざの上で寝る？」
このとき、やはり俺の意識は少し混濁していたのだろう。この美佐の言葉にそのまま流されるように美佐のひざの上で寝てしまった。
集合の時間まで後四十分以上ある。このまま美佐のひざの上で寝ているのも悪くないな・・・・・。
そして、俺の意識は美佐にゆだねるように睡眠に入った。
「龍！！起きて！！部員が結構来てるよ！！」
「あ・・・えう・・・・え？・・・わかった・・・。ありがとう。良く寝れたよ」
「どう致しまして。龍の寝顔見てるのも結構よかったよ？なんか恋人の寝顔見てるみたいで」

「そうなんだ・・・んじゃあ俺は行くよ」
俺は、集合時間を確認した
残り5分・・・ぎりぎりだったな・・・部員のところ言ったらなんていわれるだろう・・・幸いまだ勇は来ていないようだったからよかったが・・・
部員のところまで後数メートルのところで、美佐に呼ばれ、「がんばって」と最後に言っていた。
そして試合会場に向かって、電車に乗った。

一回戦の相手はそこそこに力がある学校であったが、3対0で快勝。二回戦の相手も3対0の余裕勝ち。これまでの得点はほとんど俺がゴールを決めている。この日は調子がいい。
最高に全身の神経が澄み渡っていて、どこまでもいけそうな気がしていた。
だが、こういう試合はゴールキーパーが暇になりやすいので勇が暇だったことはいうまでもないことだろう。
準決勝は、やはりここまで勝ち上がってきた学校だったので1対0でぎりぎりの勝ちとなってしまった。だがこの試合の代償で優が指を痛めてしまってゴールキーパーが出来なくなってしまった。
「わりいな・・・あんな棒球簡単に取れたのに・・へましちまって・・・」
「気にするんじゃねえ。よくとめてくれた・・・ありがとうな」
試合会場本部にいた医師の診察によるとフィールドとしては出れるようなんだが、家の部員の中ではゴールキーパーは勇ただ1人しかいない。
「後は・・・俺に任せろ。今の俺なら止められる。俺のポジション頼んだぜ」
「龍・・・気持ちは嬉しいが・・・いや・・・お前に任せる・・・お前の分の仕事、シッカリ果たしてくるぜ」
「ＯＫ」

このとき、俺たちの勝手な判断を監督は理解してくれたようだった。
そして俺の運命の歯車が回り始める試合となってしまった。
決勝は、県下の強豪、勝てる確立はとても低かった。
前半、ペースはこちらが握っていた。俺にボールは一、二度しかこなかったためだ。
正直俺は驚いていた。そして勇が豪快なオーバーヘッドから一点をもぎ取った。勇の手が気になったが、あいつが気にしていないなら大丈夫だろうと解釈した。
そして前半終了のホイッスル。
ベンチに戻ると、後ろに美佐がいたので、少しだけしゃべった。
どうやら、美佐たちの試合の帰りに立ち寄ったようだ。
「どう？勝ってる？」
「ああ・・・勇が点を決めてくれた。まったく・・・ゴールキーパーにしとくにはもったいないな」
「そうなんだ・・・でもどうして今、勇君じゃなくて龍がゴールキーパーなの？
「勇が指を怪我しちまってな・・・。だから俺がやってる訳。」
「そうなんだ・・・・・・・・・・・・・・・・・・のに」
「え？今なんていった？」
「龍が点を決めるところ見てみたかったのに・・・・」
「そうか・・・まあいいじゃねえか俺のこんな姿も見れたんだからな」
「そうね・・・・」
「・・・そろそろ時間かな？監督の指示仰ぐために、ベンチに戻らないと」
「なんだ美佐？そろそろ・・・・」
俺がベンチに向かって歩き出したら、美佐が俺の服のすそをつかんでいた。
「怪我・・・しないでね・・・・絶対に・・・私のささやかな願いなんだから・・」

少し・・・美佐が泣いているように思えた。
「大丈夫だ。俺は不死身だ。そんな簡単には倒れないし怪我もしない」
「絶対に帰ってきてね・・・絶対だよ・・・・」
今、思うとこのときに美佐は俺に起きる未来が見えていたのかも知れなかった・
後半が始まった。
後半が始まってすぐに開いてのペース、シュートがどんどん飛んできたが俺は全てはじいた。
もう、何本飛んできたかもわからない・・。体力の限界が近いことが明白だった。チームメートも疲労の色を隠せない様子だった。
そして、また何本もシュートをくらっているうちに俺は意識がはっきりしてこなくなった。
そして、残り五分。勇が相手のラフプレイにより倒された。そのときに腕を折ってしまったらしい。勇は笑っていたがつらそうな目をしていた。病院にいく前に俺だけに負けるんじゃねえと言い残して、救急車で運ばれていった。
俺は、このときに触れてはいけないスイッチを押してしまった。

自分が自分で無くなるスイッチ。憎悪と破壊を好む心
試合が再開され残り五分ボールだけを見ていた。そして・・・ロスタイム・・・
俺は相手の低めのセンタリングを取りに行った。ボールを取った瞬間、目の前が真っ暗になった。ボールを取りに行った時、相手がシュート体勢で相手の足が体にあたりその後に後頭部をゴールポストにぶつけた。遠くで試合終了のホイッスルの音。

そして、最後に美佐の声が聞こえて、俺は意識を失った

～動～（後書き）

さて・・・・寒くなってきました

運命の歯車が回ってまいりましたね・・・・・

どうなるでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

　PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1233j/

ただ、あなたのために

2011年1月26日02時57分発行